

児童虐待の
当事者となった人たちが
今——、こどもたちが
自ら未来を語りはじめた

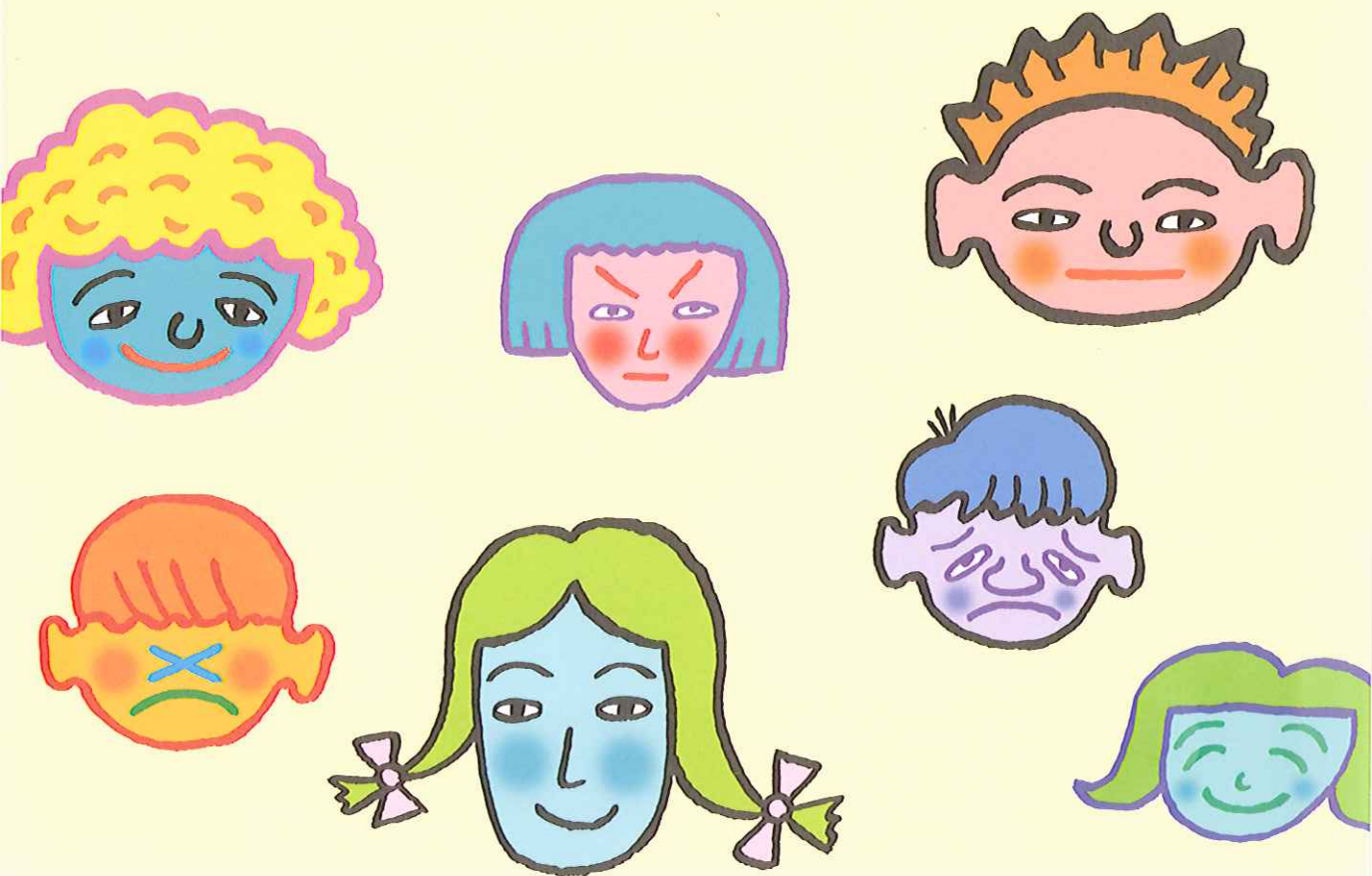
みちのくみどり学園に入ってる子どもたちの全てが
虐待を受けた子どもではありません。全体の約3割は
病気療養やその他の理由で入っている子どもたちです。

草 牙 あしかび

小池征人監督作品

こどもが拓く未来

みちのくのある児童養護施設の記録



草の若芽「草牙（あしかび）」。古くから生命力の象徴として使われた言葉。こどもたちは毎年息づく草のごとく、力強く生きています。



製作総指揮/武重邦夫 監督/小池征人 プロデューサー/小林弘典 朱凱莉 都島拓也 都島伸也 撮影/一之瀬正史 編集/村本勝 (J.S.E)

録音/若林大介 助監督・現場録音/佐藤孝 音楽/森拓治 長谷川光 ナレーター/伊藤惣一 題字/鈴木聖子 (みちのくみどり学園)

製作協力/社会福祉法人岩手愛児会 株式会社グッド・ジョブ 日本映画学校 企画/Takeshige スーパースタッフ・プログラム

製作/記録映画「草牙」制作委員会 シネマネストJAPAN ロングラン・映像メディア事業部

公式HP/<http://www.kazesoyo.com> 2009/カラー/113分/DVCAM/スタンダードサイズ イラスト/林恭三 デザイン/梶岳彦 (ebc)

厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財(高校生以上 教育福祉実践者 一般)

後援:児童虐待防止全国ネットワーク



21世紀こそ子どもたちの世紀に——



子どもたちの“こころ”を作る物語

1990年頃から顕著になってきた児童虐待は年々拡大し、かろうじて救われ、施設に保護されている子どもの数は4万人に及びます。これは幸運にも保護された数です。表に現れない数は30万人とも推定されています。未来の担い手である子どもたちの受難の先に見えるのは、ほころび始めた私たちの社会です。本作品は、岩手県盛岡市の児童養護施設「みちのくみどり学園」で職員たちの暖かなまなざしを受けながら、傷ついた心を再生していく子どもたちを通して、社会的養護の現状を描き出します。

みちのくみどり学園について

昭和32年、虚弱児施設として創設されたみちのくみどり学園は、“先駆的・開拓的・実験的”な施設運営の理念を貫き、その任を果たしてきました。平成10年4月からは、児童福祉法の一部改正により、虚弱児施設から児童養護施設になり現在に至ります。虚弱児から登校拒否児、被虐待児といった様々な子ども達を受け入れ、育ててきたみちのくみどり学園は、その時代時代における、“日本の子ども達の置かれた現状”を集約した場所だと言えます。現在、入所者は75名。その約3割は病気療養などの理由による子ども達です。そして残り7割は被虐待児です。みちのくみどり学園は、盛岡市内に留まらず、岩手県沿岸の洋野町や中山間地域の西和賀町、一関市根などの地域に子ども達とともに合宿し、社会の中で子ども達を育てる、“社会的養護”という視点を持ち、人との交流の中から生きる力をはぐくむ活動をしています。

生命の息吹——葦牙（あしかび）

「葦牙（あしかび）」とは葦の若芽のことです。春になり、水辺の葦が芽吹き、水面にそのとがった新芽が点々と顔を出します。この言葉の始まりは古く、古事記にも「葦牙の如く萌え騰れる（あしかびのごとくにもえあがれる）」と神々の誕生が記されています。「葦牙（あしかび）」は生命力の象徴なのです。子どもたちは毎年、息づく葦のごとく、力強く生きています。

「タンポポのような子どもたち」

子どもたちの強い生命力が明るく描かれていて、素晴らしい作品です。逆境をバネにして生きるタンポポのような子どもたち、その子たちを支えるまわりの大人たち。感動します。（森田ゆり／エンバウメントセンター主宰）

「ここには本当の教育がある」

虐待を受けて保護されている子たちという点、心にトラウマを抱えていじけてしまっているのではないかと、思ってしまうのだが、この映画に見る子どもたちは皆、普通の子どもたちである。むしろこの子たちは、よほど苦勞を知り、大人びているとさえ思う。たとえばひとりの男の子はスケート部の練習にうち込む。なにか自分を鍛えるということに自覚的であるという様子がうかがえる。彼は言う、「暴力の連鎖を自分の世代で止めて幸福な家庭を築きたい」と。学園の弁論大会がある。スピーチの原稿を書くのを指導員たちが懸命に指導する。指導員たちはそこに何か本質的な言葉が出てくるのを辛抱強く待っているようだ。こうして書き上げたスピーチに感動している大人の顔も見える。それが一生懸命喋った本人に“晴れがましき”として響いていってほしいと願う。いや、きっとそうになっていると思う。この子たちの健全な姿をきちんと見せてくれるのが、この映画の有難いところである。加害者である母親も登場する。このようなことが可能になったのは、母親もまた被害者なのだから、ただ責めるのでなく、和解への道を聞くという話し合いも可能だと考えられるようになったからだ。筆のつもりだった。しかしどうしてもそうしないうではなかった。どうしてなんだろう、と自問自答が出来るようになることが、当事者たちにとって解決への第一歩なのである。（佐藤忠男／映画評論家）

※本作品は、スクリーンでの上映のみという条件のもとで、制作が実現しました。DVD等の映像ソフトの販売及び、テレビ等での放映はありません。ぜひ、上映に足をお運び下さい。



日時：平成22年11月6日(土) 第1回10:00～ 第2回13:30～

会場：松本大学 2号館3階 232教室（松本市新村 2095-1）

チケット：前売大人1,000円 中学生以下500円 当日大人1,200円 中学生以下500円

お問い合わせ先 080-4115-8661(香西) E-mail eigaashikabi@softbank.ne.jp

主催：記録映画「葦牙—あしかび—」松本上映実行委員会

共催：松本大学 社団法人長野県社会福祉士会